Ch. 6　COMMENTARY

The Trouble with Prospective Memory: A Provocation

Robert G. Growder

このような記憶の研究は続けるべきである。その記憶を Ellis は memory for intended action と呼び、Goschke & Kuhl は intention memory と呼んでいる。intended action を構成するいくつかの要素は retrospective だ。Goschke & Kuhl の研究はまさにこの retrospective な方向を目指している。さて、私が話したいのは残りの retrospective でない要素のことだ。Einstein & McDaniel はこれを noncognitive factors と呼んでいる。

そういう要素を prospective memory と呼んでいいのか。

すべての想起はもともと retrospective であり、すべての意図は必然的に prospective だ。ゆえに、意図は前向きで、記憶は後向きだ。これらの概念を prospective memory のような語で融合させるのは misleading であり、軽率だろう。Mantyla の memory for future action なんて言葉は矛盾語法だ。

この本で議論されている事は performance of planned action とか carrying out delayed intentions と呼べるものと区別できはしない（prospective memory ほどキャッチーではないにしても）。「いくつかの要素は記憶に依存するし、他の要素は動機付け的要因や状況的要因（その intention が重要かどうかなど）に依存する」というのはどれでも同じだ。でも後者（prospective memory でない方）は Kvavilashvili & Ellis によって詳細に分類されている。prospective memory という語を失くせばより良くなる。

Einstein & McDaniel の章の最初で、prospective と retrospective の区別に関する問題が議論されている。

> 想起は prospective memory 課題の retrospective コンポーネントだけを覚えていても課題はうまく行かないだろう。それに加えて、適切な文脈でこの課題を忘れずに実行しなきゃいけない。

２文目の「忘れずに」という部分は要らない。下のように書きかえる。

> 想起は prospective memory 課題の retrospective コンポーネントだけを覚えていても課題はうまく行かないだろう。それに加えて、適切な文脈でこの課題を実行しなきゃいけない。

意味は変わってない。ある intention を覚えておくことは後にそれを実行することの必要条件だ。けれども、覚えておくことと実行することは異なる心理的原理に基づいている。この後で Einstein & McDaniel は次のように書いている。

> ある課題の retrospective な記憶は完璧なのに課題を実行するのを忘れることがよくある、というのは日々の経験からわかることだ。

「実行するのを忘れる」という部分を「実行するのを失敗する」に代えても同じことだ。

「prospective memory」が良い語だとこの本の全著者が確信している訳ではないし、この章にあんなタイトルが付いたのは単に私の意地悪ではないこともそれでわかるだろう。Ellis は次のように書いている。

> この章で memory という語を使うのは intended action の研究について不適切で誤解を招く書き方かもしれない。

その後にもこうある。

> prospective memory という書き方は、記憶の寄与を他の認知過程よりもあまりに強調し過ぎている。

◇

「出来事の想起」についての理論的原理と異なる原理が「意図の想起」には当てはまるのか？

意図の想起は出来事とは別でないといけないのか？

自動的検索基準[automatic retrieval criterion]（see Mantyla）（*訳語あやしい*）はきっと決定的要因ではない。記憶の自動的検索は Ebbinghaus くらい初期から注目されていた。Einstein & McDaniel が言うように、多くの retrospective memory 実験は記憶の故意検索に依存する一方、delayed intention の実行は進行中の活動の自動的な中断に依存するものである。しかし、自然な retrospective memory が自動的で受動的な検索（デジャビュや状況に因る想起）によって同様に特徴付けられることはない、と誰が言うか？ （故意検索は、事実にせよ意図にせよ、生態学的に例外的な方略なのかもしれない。）

Mantyla & Jonzon(1994)の活性化時間の効果がないという結果はリハーサルの研究（Woodward, Bjork, & Jongeward, 1973）や反復プライミングの研究（Roediger & Challis, 1992）で先例がある。その上、表向き無関係な背景課題による intended action のプライミング（Mantyla の章）は prospective memory だけに当てはまる新たな原理ではない。（Roediger, 1990）

Goschke & Kuhl の研究が intention superiority effect を同定している。これは古典的なレストルフ現象に近代的な意味を与えるものであるが、どちらかと言うとこっちのほうが、記憶の新たな原理の資格がある。この研究では実験から符号化要因を入念に排除することで、効果をよくある符号化要因ではなく intended action に帰属できた。が、この現象は prospective memory の新たな特徴なのか？ おそらく違う。なぜなら Mantyla が言うようにこれは真に retrospective memory の現象である。よってこの効果は別の強力な処理水準の操作との関連を考えるべきだ。

さて、私はまず、「記憶課題を行いながら口頭提示のターゲットに反応する」という Einstein & McDaniel（1990）の実験によって prospective memory という新たな領域への警戒警報を受けた。その衝撃的な結果というのは、この課題において（retrospective memory のすべての研究とは対照的に）加齢効果がないことであった。その年、私は記憶についての学部授業で、それまでの研究から予想されるのとは異なる法則に従っている記憶だと提案していた。そしてこの本の Einstein & McDaniel の章において、時間ベースと事象ベースの手がかりの区別という点でこの状況を合理化

する Cunfer & Richardson の研究を学んでいる。根本的な要因は時間知覚の差異に伴う手がかりのタイプへの敏感性だろう。思いがけない結果を導いたのは Einstein & McDaniel（1990）の課題の prospective な性質ではなく、むしろ様々なタイプの状況的手がかりへの敏感性における年齢差だ。もう一度。最初に retrospective memory でなく prospective memory に当てはまる思いがけない原理であるように見えたものは、我々がよく調べてきた原理の特殊なケースであることが判明した。

◇

日々の経験と一般の言語の両方で prospective memory の事例と失敗に満ちていると言う人もいるだろう。私はこれを即座に否定はしない。最近のある朝、私は夕食の時間までに買い物をするのを忘れていたし、別の夜、町のゴミ収集の曜日にゴミを出すのを忘れていた。こういう出来事を forgetting と呼ぶことは、それをそのように表現できていない。一般の言語には、その分野内では正確な専門的意味を持っていても口語の用法においてはまったく正確でない語や表現がたくさんある。例えば reminiscence、recall、recognition、reward、rehearsal、decay。

◇

intention は、他の心的出来事のように、覚えておく or 忘れる ことができる。しかし、もう一つの基準がこの研究に紛れ込んでいる。それは、

行為が特定の手がかり状況で実際に実行されたかどうか。

（Mantyla の intended action の実行に関する再三再四の主張が典型的な例である。）意図が後に実行されるのはいつ、そしてなぜ、なのかを我々が理解することは生態学的に重要である。しかし、行為の実際的遂行いかんは、どのようにその意図を覚えているか（覚えていないのか）を研究するには非現実的な基準である。Kvavilashvili（1987）は顕在的な意図の想起は所定の時間にそれを実際にやったかどうかとは相関しないことを最初に示した。

intended action の記憶に対するこの基準の不適切さを認識するには、impossible な意図を考えればわかる。（四角形の組み合わせで円を作る、πの正確な値を見つける、4 次のグレコラテン方格法を構築する、など）これらの不可能な意図は覚えられるが、成し遂げられない。従って、初めに言ったように、意図の記憶はその後の実行の必要条件であるが、十分条件でなくてよい。

Goschke & Kuhl の章では、意図の記憶について我々が利用可能な基準に直接的に取り組んでいる。彼らが用心深く結論しているように、これらの考えは利用可能なデータのみならず、さらなる研究計画で調べる必要がある。

◇

意図の記憶が prospecctive な状況で役割を果たしていることの認識は常識に先立っている。意図の記憶の活性化と cueing はこれらの章の中でよく研究され、理解されている。（*ほんまかいな？*）